



伝統的な言語文化

「古典の世界（一）」（五年ほか）

― 古典を感覚的に味わうことで、興味・関心を高める ―

古典教材を扱う際、まずは文章の内容を理解させたいと考え、現代語訳や解釈を行うことが多いと思います。しかし、すればするほど、子どもたちの反応がだんだん鈍くなる、といった経験はないでしょうか。今回は、指導者用「国語デジタル教科書」（以下、「デジタル教科書」）に収録されているワーク・資料や、朗読、書き込み機能などを効果的に活用することで、子どもたちの興味・関心を高める実践をお伝えします。



1974年生まれ。広告代理店勤務を経験した後、公立小学校教諭に。横浜市小学校国語研究会を中心に、市内の国語教育推進に取り組む。

本単元では、音読を通して古文の言葉の響きやリズムを味わい、文章の内容の大体を知るとともに、昔の人のものの見方や感じ方について知ることができるとをねらいとしています。中学年で俳句や短歌について学習しているとはいえ、本格的な古典と出会うことが初めての子どもがほとんどです。出会う言葉や文章が難しいと感じてしまうと、学習意欲が低下してしまうので、普段見慣れない言葉が多く使われている古文に対して、どのように興味・関心を抱かせるかがポイントになってきます。

また、古文の現代語訳を読むだけでは、なかなか「昔の人のものの見方や感じ

指導目標

- ◎昔の人のものの見方や感じ方について知ることができる。【伝国(1)ア(イ)、イ(カ)】
- 古典の文章を音読し、言葉の響きやリズムを味わうとともに、文章の内容の大体を知ることができる。【伝国(1)ア(ア)、イ(イ)】

指導計画(全3時間)

1時	<p>『竹取物語』の始まりの部分の朗読を聞き、自分が知っている『かぐや姫』の物語との違いについて話し合ったり、今も使われている言葉を探しながら文章の意味を考えたりする。</p>
2時	<p>・『竹取物語』について解説した動画を視聴したり、始まりの部分で暗唱したりしながら、昔の人のものの見方や感じ方に触れ、感じたり考えたりしたことをワークシートに書く。</p> <p>・『平家物語』『徒然草』『おくのほそ道』の始まりの部分で音読し、その中からお気に入りの作品の一つを選ぶ。</p>
3時	<p>自分が選んだお気に入りの作品について解説した動画を視聴したり、始まりの部分で暗唱したりしながら、昔の人のものの見方や感じ方に触れ、感じたり考えたりしたことをワークシートに書く。</p>

デジタル教科書の活用場面①
古典に親しみをもつて出会う。

デジタル教科書の活用場面②
「昔の人のものの見方や感じ方」に迫る。

方」について知ることではできません。現代の子どもたちの生活との相違点を探りながら学習していくことが大切です。しかし、その際、違いだけでなく、現代との共通点にも着目することで、昔の人と、今を生きる自分とのつながりを感じ、「昔の人のものの見方や感じ方」に興味・関心を抱いていくと考えています。そこで、本単元では、次のような手立てを大切にしながら実践しました。

- ① 古典に親しみをもつて出会うための手立て
- ② 「昔の人のものの見方や感じ方」に迫る手立て

これらの手立てをより効果的なものにするために、デジタル教科書を活用していきます。

デジタル教科書の活用場面① 古典に親しみをもつて出会う

五年の教科書教材「古典の世界」は、(一)では『竹取物語』や『徒然草』などの古文、(二)では『論語』や『春曉』などの漢文が教材となります。どれも有名な古典ばかりです。「古典の世界(一)」では、登場するすべての作品を一気に扱

うのではなく、まずは『竹取物語』と出会うところから単元を始めました。

『竹取物語』は、有名な昔話『かぐや姫』の原作であるため、子どもたちは大体のあらすじを知っています。さらに、「いまはむかし…」という始まりの文から、聞いたり読んだりしたことのあるさまざまな昔話を想像する子どもも多くいます。そこで、導入場面で、原文を読ませるのではなく、耳で聞かせることからスタートします。デジタル教科書の朗読機能を使い、原文の朗読を聞かせます。その際、デジタル教科書の教科書画面に映っている『竹取物語』に関する情報(題名、本文、現代語訳、解説等)は、ふせんを使って隠しておきます(※1)。「いまはむかし…」のところで、朗読音声の一時停止を行います。すると子どもからは、『桃太郎』『浦島太郎』などの昔話を想起した発言がみられ、「きつと昔話に違いない」と想像が膨らみます。そして、「たけとりのおきなといふものありけり…」のところで、昔話の『かぐや姫』だと気がついていきます。その後の朗読では、『かぐや姫』を思い出しながら聞き入っている姿が見られました。

続いて、「どうして『かぐや姫』だと分かったのか」について考えていきます。

本文をすべて隠してしまうと、朗読機能が使えなくなるので、文頭が少しだけ見えるように「ふせん」をのせるのがポイントです。



▲※1 『竹取物語』の教科書画面。朗読を聞かせている間は、題名・本文などは、「ふせん」を使って隠しておく。

子どもたちからは、「『竹取』という言葉が出てきた」「(三寸)」という言葉が出てきた」などの発言が相次ぎました。そこで、隠しておいた本文を画面上に示しました。そして、書き込みツール(直線)を使い、「今も使われている言葉」にラインを引いていきます(次ページ※2)。子どもたちは、普段見慣れない古文の中から、自分たちが知っている言葉だけを見つけていきます。そして、知っている言葉だけをつなぎ合わせながら、この物語のあらすじを捉えていきました。

さらに、ラインを引かなかった言葉、つまり、「今は使われていない言葉」に



▲※4 「古典の世界(一)」のワーク『竹取物語』を暗唱しましょう。をクリック一つで、言葉を隠したり表示したりすることができる。



▲※3 「古典の世界(一)」の動画資料「かぐや姫と五人の貴公子」。



▲※2 『竹取物語』の教科書画面。書き込みツール(直線)を使い、「知っている言葉」にラインを引く。

着目し、その意味を推測していきます。子どもがもとも知っている話なので、言葉の意味を推測するのは、それほど難しくありません。少しのチャレンジで解決できる課題のため、どの子どもも意欲的に活動に取り組むことができます。「竹取の翁という人の名前が、(さぬきのみやつこ)なのかな」「もと光る竹…」ということとは、竹の根元が光っていたということかな。そうすると、この部分のどこかな」そう言つて、竹の絵を描いて説明し始める子どもも出てきます。デジタル教科書の朗読機能を活用しながら、まずは音声のみの情報に限定して提示する

ことで、子どもたちの知っている言葉をやっつけやすい状況ができ、本来難しく感じるはずの古文との出会いの壁をなく乗り越えることができました。そして、書き込みツールを使って、「知っている言葉(今も使われている言葉)」を視覚的に浮かび上がらせることで、逆に「知らない言葉(今は使われていない言葉)」に着目するようになり、意欲的に『竹取物語』の解釈を行う姿へとつながっていきました。

朗読機能は、古典の学習においてとても重宝します。「古典の世界(二)」の『春暁』では、教師が漢詩の原文を用意し、その原文を見せながら朗読を聞かせます。一見難しそうに見える漢詩の原文に対し、その読み方が分かり、子どもたちと漢詩との距離が一気に近づいていきます。初めは戸惑う子どもが多いのですが、『竹取物語』の授業と同じように、「知っている漢字」に着目させることで、興味・関心が高まっています。

また、六年の『柿山伏』では、狂言の言い回しを真似ながら音読する際、朗読機能の「ここを読む」(選択した部分のみ朗読する機能)が役立ちます。自分が担当する文章(台詞)のどこを何度も聞きながら練習する子どもの姿を見る

たちは、自分が知っている『かぐや姫』と比較しながら、『竹取物語』の世界に入っていきます。

また、三時で『徒然草』を選んで暗唱した子どもは、『ワーク・資料』の動画に登場する「高名の本登り」の話を知り、昔の人が日常の教訓として考えていたことが、現代にも通じていることに驚き、『徒然草』の他の話も読んでみたいと興味・関心をもっていました。

デジタル教科書では、古典教材の『ワーク・資料』が充実しています。五年には、『兼好法師と『徒然草』や『松尾芭蕉と『おくのほそ道』』などの解説動画や、『琵琶による語り(『平家物語』)』、六年には、『落語『初天神』』『狂言『柿山伏』』の動画などが収録されており、本物に触れることができる資料が多くあります。教材文だけではなく、それらの資料を有効に活用することにより、「昔の人のものの見方や感じ方」を感じるきっかけが増えると考えています。

また、古文や漢文を暗唱する際、『ワーク・資料』の暗唱用ワーク(※4)を活用すると、より効果的です。本文の言葉を隠したり表示したりすることができるので、子どもたちの暗唱の状況に応じて隠す量を調整するなど、少しずつステッ

ことができました。ただ音読するのではなく、実際の狂言の言い回しを聞きながら音読することによって、狂言独特のリズムや言い回しを実感することができ、その実感が、「昔の人のものの見方や感じ方」を知ることへとつながっていくのです。

デジタル教科書の活用場面② 「昔の人のものの見方や感じ方」に迫る

『竹取物語』のおおまかなあらすじを捉えた段階で現代語訳を提示すると、子どもたちは、自分の解釈と比べながら興味・関心をもって現代語訳を読むことができます。その後、現在も読まれている『かぐや姫』のあらすじを、子どもたちの記憶をもとに確かめていきます。昔話は、口承文学なので、物語の細部については、人によって内容が異なっていたり、記憶自体が曖昧だったりすることがあります。そこで、デジタル教科書の『ワーク・資料』の動画「かぐや姫と五人の貴公子」(※3)を視聴します。動画では、かぐや姫が貴公子たちに無理難題を課し、貴公子たちがそれを解決すべく奔走する様子が語られています。子ども

ブアップしながら暗唱をすることができ、原文を音読しながらひたすら暗唱することも大切ですが、デジタル教科書の視覚的効果を活用しながら、楽しく暗唱をすることで、難しい古典の文章との距離が縮まるのではないのでしょうか。

デジタル教科書を活用して

デジタル教科書の視覚的効果や聴覚的効果を活用しながら、子どもたちにとって難しいと感じる古典への導入を工夫する実践を紹介しました。子どもたちが、初めて出会う古典に対して難しいものと感じるか、おもしろそうと感じるか、その後の古典の学習との関連を考えると、その導入はとても重要だと考えています。また、子どもがなかなか想像しにくい昔の様子について、視覚的な資料を活用する効果は大きいと実感しています。しかし、動画資料を視聴すれば、必ず効果があるというわけではありません。動画資料の情報を限定したり、絵巻物などの静止画を活用したりするなど、子どもの実態に応じた工夫が必要です。デジタル教科書を効果的に活用することによって、古典を感覚的に味わうことができ、子どもたちの古典への興味・関心を高めることができると思っています。